

学会・シンポジウム情報

2003 秋季藻類シンポジウムのご案内

「海藻加工技術の現状と展望」

海藻は伝統食品として日本人の健康に大きく関わっており、その効果が科学的に解明されて価値が再認識されている。用途の多様化から、従来の海藻製品に新しい加工を加える技術が進み新規商品の検討も広く行われている。ノリ、コンブ、ワカメ、ヒジキ、アオノリ、モズクなどについて、原料から製品までの加工の現状が紹介されるとともに、新しい加工技術の展望と用途について、それぞれの海藻の加工に関わっている企業サイドからの講演が行われる。

このシンポジウムは、日常、食している海藻が、どのように作られてくるか、また、新しい利用の分野について、わかりやすく紹介される。教育、研究、企業に関わる方々に、興味を持たれるように講演されるので、進んでご参加、ご聴講下さい。

日 時：平成 15 年 10 月 10 日（金曜日）
午後 1 時より 5 時、シンポジウム終了後 懇親会

場 所：ロイヤル・パークホテル
（東京・日本橋、地下鉄半蔵門線、水天宮駅隣、
Tel: 03-3667-1111）

参加費：シンポジウム 無料（講演集 1,000 円）
懇親会 8,000 円

主催：日本藻類学会・日本海藻協会
協賛：日本応用藻類研究会

参加の問い合わせ先：日本海藻協会事務局 大野正夫（高知大学海洋生物教育研究センター）

TEL& FAX：088-856-0462 E-mail: mohno@cc.kochi-u.ac.jp
会場準備のために、シンポジウムと懇親会参加者は、できるかぎり 9 月 10 日までに上記の事務局へ email か Fax で申し込み下さい。なお、当日参加も可能です。

2003 年度「藻類談話会」のお知らせ

「藻類談話会」は藻類を研究材料とする幅広い分野の研究者の集まりで、西日本を中心に講演会や研究交流を行っています。今年度は以下の講演を企画しています。ふるってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時：2003 年 11 月 22 日（土）13:00-17:00
場所：神戸大学瀧川記念学術交流会館（神戸市灘区六甲台町 1-1）

講演予定（敬称略）

加藤亜記（神戸大・内海域機能教育研究センター）：日本産殻状紅藻イワノカワ科（スギノリ目）の系統分類学的研究について

二羽恭介（兵庫県立農林水産技術総合センター・水産技術センター）：養殖ノリの由来と品種改良

関田諭子（高知大・理）：渦鞭毛藻の細胞外被の構造と形成過程

宮下英明（京都大院・地球環境学堂）：クロロフィル d をつかうシアノバクテリア "Acaryochloris" の謎

参加費：500 円（通信費など）

談話会終了後、同会館の 1 階食堂ホールで懇親会が予定されています（会費：一般 3,500 円、学生 1,500 円）。

談話会および懇親会の参加希望者は 11 月 10 日（月）までに電子メールかファックスで下記の宛先へお申し込みください（当日参加も可）。また最新情報は下記ホームページに適宜、掲示しますのでご覧ください。

会場への道順：阪急電車「六甲」駅、JR「六甲道」駅、阪神電車「御影」駅から、市バス 36 系統「鶴甲団地」行きに乗車、「神大文・理・農学部前」下車。または阪急電車「六甲」駅から北へ徒歩約 10 分。

参加申込・問合せ先

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学大学院 人間・環境学研究所 相関環境学専攻
幡野 恭子

TEL：075-753-6854 FAX：075-753-6549

e-mail：hatano@bio.h.kyoto-u.ac.jp

2003 年度藻類談話会ホームページ：

<http://biotech.nikkeibp.co.jp/100HP/> より「バイオ・基礎医学関係者の皆のホームページ」→「学会・研究会」の項目をお選び下さい。

自然史学会連合ニュース

2002年度自然史学会連合総会議事録

2002年12月7日(土) 10:00-11:30 国立科学博物館分館
(東京・新宿)

報告事項

- 1) 連合ホームページは編集委員会を設置し、内容を大幅改訂した。
- 2) 地域教育アクションプランは、名称を「自然史教育展開プログラム」とし、2002年度は千葉県博において理科教員対象の地学系の実習を実施した。
- 3) 地域博物館アクションプランでは「展示活動と研究活動」についての地域博物館対象に行った連合アンケートの結果の出版準備状況が説明された。

審議事項

- 1) 2001年度決算報告および監査報告、2002年度会計経過報告、2003年度予算案

これらはいずれも承認された。詳細は省略。

2) 各種作業部会の設置

自然史教育展開プログラム、地域博物館アクションプラン、およびホームページ編集委員会の活動を高める目的で、作業部会の設置の必要性について説明した。特に前二者については現場の会員の周りに組織を作って連合が支援する体制作りの必要性、および人選については連合から指名(連合代表から嘱託)および加盟学協会からの推薦も欲しい旨説明がなされ、設置が承認された。

3) ホームページの有効活用

編集委員会の活動内容説明の他、HP業者(モノリス・中村氏)から、デモをともなった連合HPの改良点や紙面の充実方法について説明がなされ、各学協会、運営委員会および中村氏の間で意見交換を行った。編集委員会からHP掲載用の原稿や写真(エッセイ、ギャラリーおよびコラム)への協力が呼びかけられた。編集に関わる要綱などは作業部会で検討する等、各種の案について説明があり、承認された。

4) 学協会からの報告

(1) 菌学会から出版助成費に関わる情報提供について各学協会へのお礼とその後の経過報告について報告された。

(2) 動物学会から特定欧文誌を持つ学協会への科研費の見直し状況について説明がなされた。詳細を知りたい団体には情報を提供する。

5) 2003年度総会・シンポジウム

11月29日開催。総会で連合代表の選出。主催シンポジウムは「予測の自然史科学-未知と未来へのアプローチ-」を予定する。

自然史学会連合第8回シンポジウム

「極域の生物学-フィールドサイエンスの最前線-」と題されたシンポジウムが、2002年12月7日(土) 13:00-17:30、国立科学博物館分館(東京・新宿)において開催された。

2003年度第1回自然史学会連合運営委員会議事録

2003年2月8日(土) 10:00-12:00 国立科学博物館分館
(東京・新宿)

報告事項

- 1) 基生研で開かれた国際高等コンファレンス意見交換会(1月20日)の会合内容と発足に関する要望書について報告された。
- 2) 連合シンポジウム「極域の生物学」のアンケート結果と参加者の動向について報告された。
- 3) 連合シンポジウム「予測の自然史科学」の準備状況と宣伝方法について報告された。
- 4) 共催シンポジウムの公募および応募状況について報告された。

討議事項

- 1) GBIFの国際フォーラム(10月4-10日、つくば市)への後援と連合シンポジウム

志村氏(環境研)から国際フォーラムの詳細と協力要請について説明がなされ、まずは後援団体として協力し、シンポジウムについては運営委員会で骨格をつくり、加盟学協会へ意見をもとめながら検討することとした。

- 2) 地域博物館アクションプランに関連した作業部会の設置

自然史の研究・教育拠点としての博物館の抱える諸問題を分析し提起する部会と位置づけ、任期、事務局、人員構成等について検討した。

- 3) 「自然再生基本方針(案)」へのパブリックコメント

環境省の「自然再生基本方針(案)」への対応について委員会で協議し、連合から提出する意見(草案)を作成した(下記参照)。詳細については環境省ホームページ(<http://www.env.go.jp>)で閲覧可能。

- 4) 連合代表の任期

代表任期を連続2期(4年)までとする案について検討した。今年度の総会では、代表選挙がある。

- 5) その他:

運営委員会を総会(11月29日)までに、4回(2, 4, 7, 10月)開催する。

「自然再生基本方針(案)」についての自然史学会連合の意見書

「自然再生基本方針(案)」は、貴重な自然を健全な状態で将来にわたって継続し、人類およびすべての生物が適切な環境下で共存してゆくための有用な指針なるものであると考えられ、各種策定や実施に関しては、「生物多様性国家戦略」の趣旨を尊重し、適切かつ最善に自然が保護されることを切に希望するものであります。特に「自然再生協議会」の機能が基本方針の是非の鍵になりますので、人員構成をはじめ協議会を設置する際は時間と労力を惜まず努力されることを望みます。その上で協議会が健全かつ有効に機能することを期待しております。現行の案では、以下の点についてさらなる配

慮が必要であると思われます。

自然再生の方向性について

我々の周りにある環境は長く複雑な歴史の上に成り立っております。我々自然を対象に研究する者(科学者)にとっても未知のものや現象が多く残されています。実施者はこれらを考慮し、生態系の蘇生に係る部分については、極めて慎重に対応することが要求されます。例えば当該地域に少なくなつた生物を他の地域から積極的に持ち込み補足するような短絡的な実施案があるとすれば、それは当該地域の対象生物の遺伝的な特性の消失に結びつくことから科学的に非難されることは明白です。また当該地域にどのような生物が息しているのかといった基本的なことは当然のことながら、生物間や環境と生物の関係も重々に調査し把握しておく必要があります。自然再生基本方針は「保全」、「再生」および「創出」の三本柱から構成されていますが、「保全」こそが幹であり、そのための基礎的な調査とその後のモニタリングが最も重要であることは特筆されるべきでしょう。

科学的知見に基づく実施

科学的知見は議論を論理的に進める上で必要不可欠ですが、科学者間でも同じデータを全く反対の意味で解釈することがあります。また「自然」に対するイメージも、専門分野(例えば、農学、工学、理学)が異なると違うということも十分に考慮が必要な部分です。自然環境を損なつた原因の究明に加え、再生の目標や有効な方法を模索する上でも、データの解釈については可能なかぎり多岐にわたる専門家(科学者)から意見を聞くことが必要であり、知見同様に目標や方法を決めるプロセスについても透明性が保たれないと意味がありません。科学的知見も人類の共有財産ですので、意義のある使われ方を強く希望いたします。また、自然史学会連合は自然史科学に関連する科学者集団として、時宜に応じた助言や協力を惜しみません。

自然環境学習の推進

自然環境学習は、地域特性や教育効果の点から、地域の博物館・動植物園等機関に多くを委ねることが最も有効かつ現実的な方法と考えられます。そのためには、各機関の学芸員に当該地域の自然について十分な研究をさせる機会を創出すること、さらに多岐にわたる専門家を各機関に配置することが肝要であると思われます。また、一般の方々に自然体験や保全活動へ関心をもたせるためには、学習する場を設けるだけでなく、体験や活動の必要性や意義を周知させる必要があります。自然環境学習を推進する上で必要不可欠な人材の発掘や、普及講演会や情報交換の場を増やす努力についても考慮が必要と思われます。

(自然史学会連合、代表:森脇和郎理研筑波研究所バイオリソースセンター所長)

付記 自然史学会連合は自然史科学全般に関わる研究・教育を振興し、現代社会に必要な正しい自然観を普及することを目的とした自然史系学協会の連合組織です。

平成15年2月24日現在、以下の34学協会が加盟しています。種生物学会、植物地理分類学会、地衣類研究会、地学団体研究会、東京地学協会、日本遺伝学会、日本衛生動物学会、日本貝類学会、日本花粉学会、日本魚類学会、日本菌学会、日本蜘蛛学会、日本古生物学会、日本昆虫学会、日本昆虫分類学会、日本植物学会、日本植物分類学会、日本人類学会、日本生態学会、日本生物地理学会、日本蘚苔類学会、日本藻類学会、日本第四紀学会、日本地質学会、日本鳥学会、日本地理学会、日本動物学会、日本動物行動学会、日本動物分類学会、日本プランクトン学会、日本ベントス学会、日本哺乳類学会、日本鱗翅学会、日本霊長類学会(順不同)

田中次郎(東京水産大学)

編集後記

表紙の写真に何をを使うかで悩みました。白黒写真でということになっているので、色の表現をうまくできない。今回はウミウチワの水中写真を使うことにしました。これは、水中デジカメで撮影したものです。最近のデジカメの進歩には驚いています。とにかく押せばそれなりに写る。フィルムの枚数を気にしなくてもよい。ハウジングに入れば水中写真もきれいに写る。記録写真、顕微鏡写真、画像解析に大いに利用しています。問題点が一つあります。電池なければただのアクセサリ。どうも電池の持ちが悪いように思う。最近は大容量の大きいデジカメ用の電池が発売されているので、フラッシュと液晶画面をつけっぱなしでも100枚程度なら写せます。しかし、水中で電池を交換することはできない。人間は、便利な道具ができると益々欲が出るものらしい。(M.M.)

今までと少々字体が異なっているのにお気づきでしょうか?編集長の強い希望により、今までのMacintoshから(心ならずも)Windowsによる編集にしたため、フォントを変更しました。前回、やっとな作業に慣れてきたと思ったらWinへ移行したため、またまた慣れるのに時間がかかってしまいました。でも、これでMacの方でもWinの方でも編集ができるようになりました。(A.K.)